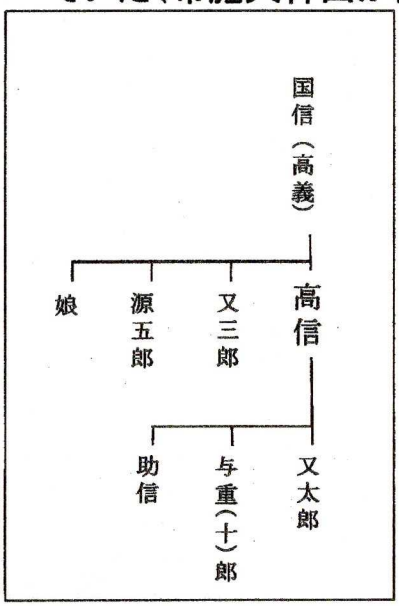
郷土誌だより（12月号）

美穂地区郷土誌委員会
2016年12月1日

鵜尾城に関する武田一族を掲載します

1520年代、因幡地方は但馬山名氏の統治下にあり、守護職には山名豊治がその任にあたっていた（布施天神山が因幡山名氏の城・・・旧、鳥取農業高校周辺）。

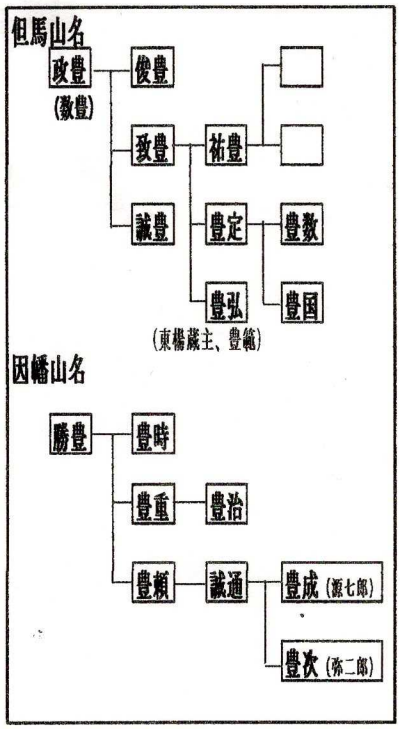


山名豊治には跡継ぎがなく甥の誠通が但馬の山名誠豊の支援を受け守護職となった。

この頃、出雲の尼子氏の勢力が因幡地方に及んでくると因幡の山名誠通は尼子氏と通じ、但馬山名氏からの自立を目論んだため対立関係となった。

但馬の山名誠豊の跡を祐豊が継ぐと因幡、但馬の両山名氏の対立が激化し、巨濃郡（現、岩美郡）岩井口の武力衝突を契機に戦いを繰り返すようになった。

因幡の山名誠通は本拠地の布勢天神山城の守りを固めるため久松山に新しく城を築いて（鳥取城）、但馬山名氏の進攻に備えた。この城（鳥取城）は新城で整備が行き届かなかったので重臣らが輪番で任につくことになっていたが多くの重臣は嫌がった。その中で自ら進んで城番になったのが鵜尾城主の武田国信（高義）で武田高信の父であった。国信は鳥取城を整備し充実し、勢力を拡大していった。



1548年（天文17年）、八頭郡の八上口に多くの兵力を出兵し手薄になっている隙に本拠地の布勢天神山城が但馬山名氏に襲撃され因幡の山名誠通は討死した。因幡山名氏の諸将は知らせを受け但馬山名氏の軍勢を撃退したが主君を失ったため因幡山名氏は存亡の危機となった。

因幡の山名誠通には子息があったが幼かったので重臣の森下、中村、武田等の重臣らは但馬山名祐豊へ帰服することで和議を結んだ。

山名祐豊は弟の豊定を布勢天神山城主に送り、また巨濃郡（現、岩美郡）の二上城主に、末の弟を送り三上兵庫頭豊範と名乗らせた。

因幡は但馬山名氏の統治下に戻ったが因幡の山名誠通の子息が成長することで再び争乱の時代となる。

武田国信の跡を継いだ嫡男、武田高信（鳥取城主）は弟の又三郎を鵜尾城主とし、因幡東部地方の豪族や巨濃郡（現、岩美郡）の二上城主の三上兵庫頭とも通じてその勢力を拡大していった。1563年（永禄5年）ごろには、毛利氏と通じて主家、因幡山名氏と対立する姿勢が露わになった。1564年（永禄6年）因幡山名豊数（豊定の子息）の重臣中村、森下らは鳥取城へ攻めたが返り討ちとなり因幡山名豊数の権威が失墜し因幡の諸将たちも自立する動きが広まった。武田高信の勢力が拡大するのに対抗するため鹿野城主に山名誠通の子の源七郎を当て勢力の回復を目論んだが高信の謀略で打ち取られた。源七郎の弟、弥二郎も立見峠で討ち死した。

その後、豊数の跡を弟の豊国が因幡山名を継ぎ武田高信と対抗するようになる。

武田高信は因幡一国の支配に乗り出したが但馬山名氏や智頭郡一帯に勢力を有する美作の草刈氏の存在が大であり前途は多難であった。毛利氏の傘下に入っている武田高信と草刈景継氏とは領有地をめぐって、やがて対立するようになる。

次号へ続く